

朝の通勤ラッシュは、いつも憂鬱だ。

満員電車に押し込まれて、身動きも取れないまま揺られる時間。今日も変わらない月曜日の朝——のはずだった。

電車がホームに滑り込んできた。乗り込んで、いつもの場所に立つ。ドア横の手すりを掴んで、スマホを取り出した。

次の駅でどっと人が乗ってきて、一気に車内が混み合った。背中に誰かの体温を感じる。満員電車ではよくあること。気にしないようにスマホの画面に目を落とした。

——その時だった。

「黒いコートで、8時15分、この車両。君だよね？」

低い声が、耳元で囁かれた。吐息が耳にかかる距離。近い。近すぎる。

「え……？」

振り向こうとした。でも、満員で身体が動かない。背中に密着してい

る誰かの体温が、やけに熱く感じる。

「人違い——」

そう言おうとした瞬間、唇のすぐ横に指先が触れた。

「しっ。声、出さないで」

耳元で低く囁かれる。その声で、背中にいるのが男だと分かった。指先の感触から、大きな手だと分かる。香水の匂いがする。嫌な香りじゃなかった。どこか高級そうな——大人の男の香り。

(何、この人……っ)

混乱した。痴漢？ でも、何か勘違いしているみたいなお口ぶりだった。緊張してる？ 肩、ガチガチだよ」

大きな手が、肩に触れた。コートの上から、ゆっくりと撫でられる。

「ちが……私——」

「大丈夫。リラックスして」

「あの……」

「もしかしてこういうのはじめて？」

全然話を聞いてくれない。この人は誰かと待ち合わせしてたらしい。黒いコートを着た誰かと。どうやらそれが私だと勘違いしてるみたいだ。(……ちゃんと誤解だつて言わないと)

「あの、本当に人違い——」

「照れなくていいって」

肩を撫でていた手が、腰に回された。コートの上から、腰骨のあたりを親指でくるくると撫でられる。

くすぐりたい。でも、振り払えない。満員電車で暴れたら目立つ。周りの人に見られたくない。

「本当に私じゃ——」

「そういう設定？ 分かった、俺たち初対面の他人ってことでいいね

？」

低い声で笑われた。全然伝わってない。何を言っているんだろう。本当に人違いなのに。

——待って。

初対面の他人、という設定。黒いコート、この時間、この車両という待ち合わせ。

(もしかして……痴漢プレイ?)

ネットで見たことがある。合意の上で、知らない男に電車で触られるって言う——そういうのに応募する女の人がいるって。

(この人、私をその相手だと思ってる……?)

背筋が冷たくなった。つまり今から、そういうことをされる。満員電車の中で。知らない男に。

(声、出さないと——でも)

もし「痴漢です」と叫んだら、この人は捕まってしまう。

でも、この人は本当は、ちゃんと待ち合わせをしていたはずなのだ。相手の女の人と合意の上で。私が間違えられただけで。

(私が声を出したら、この人……犯罪者になっちゃう……?)

本当に合意の上ならこの人はそこまで悪いことをしている訳じゃない。ただ、相手を間違えたただけで。

(それで逮捕はさすがに可哀想……?)

——そう思うと、誰かに助けを求めができなかった。

そうしてぐるぐる考えているうちに、腰に回された手が、少しずつ下りていく。コートの裾をまさぐるように、布地を撫でていく。

「ちょ……っ」

「声、抑えて。周りに聞こえちゃうよ？」

耳元で囁かれて、ぞくりとした。隣に立っている人との距離は、三十

センチもない。少しでも大きな声を出したら、すぐにバレてしまうだろう。

(どうしよう……っ)

コートの裾から、手が入ってきた。スカートの上から、お尻を撫でられる。

「んっ……」

声が漏れそうになって、慌てて唇を噛んだ。

(だめ……声出したら周りに聞こえる……)

「いい形してるね」

囁かれながら、お尻の丸みに沿って掌が這う。布一枚隔てているのに、指の形が分かるくらいしっぴかり揉まれる。

クニユツ♡ クニユツ♡

「っ……♡」

息が詰まった。口に手の甲を当てて、必死に声を殺す。

(やだ……こんなの……)

周りを見る。誰も気づいていない。みんなスマホを見てるか、目を閉じてるか。でも、こんなに近くににいるのに。すぐ隣で、私がお尻を触られてるのに。

スカートの裾が、するりと持ち上げられた。

ストッキング越しに、太ももを撫でられる。後ろから、ゆつくりと、内腿の方へ。

「っ……！」

(そこ……指……こっちに来ないで……)

指先が、肌の上を這っていき、すーっと内腿に近づいていく。

「ここ、柔らかいね」

耳元で囁かれながら、内腿をゆつくりと揉まれた。

クニユツ♡ クニユツ♡

「んっ……♡」

唇を噛んで、声を殺した。けれど、どうしても鼻から息が漏れる。

(だめ……声……)

「敏感？」

「……っ」

首を横に振った。でも、身体は正直に反応している。腕に鳥肌が立っているのが、自分でも分かった。

指が、さらに上へ這い上がっていく。太ももの付け根に近づいていく。

(まって……そこは……)

ショーツの上から、そこに触れられた。

クニツ♡

「——っ♡」

声が出そうになって、慌てて口をより強く押さえた。心臓がバクバクと音を立てている。

「……もう濡れてきてるね？」

耳元で囁かれて、顔が熱くなる。

ショーツ越しに、指の腹でグリッ♡と敏感になってきている箇所を押された。

「んんっ……♡」

膝がガクツとなりそうになった。手すりを握る手に、力が入る。

(やだ……声、我慢できない……)

「電車の中で知らない男に触られて感じてる。——エッチだね」
囁かれながら、指がショーツの上から割れ目をなぞった。

クチュ……♡

「っ……♡」

息を止めた。隣の人が、一瞬こちらを見た気がした。心臓が跳ね上がる。

(ばれた……? ばれてない……?)

「静かにしないと、ばれるよ?」

分かってる。分かってるのに、身体が勝手に反応してしまう。

指の動きが、少し速くなった。

クチュクチュ♡ クチュクチュ♡

「ん……っ♡ んんっ……♡」

声が出ないように、鼻から息を漏らすことしかできない。声を出したら終わりだ。でも、触られるたびに身体が震える。

(やだ……こんなの……人違いなのに……)

「ここ、ぷっくりしてきた」

クリトリスの場所を、ショーツ越しに指の腹で押された。

グリッ♡

「っ——♡♡」

膝が震えた。手すりにしがみついて、必死に体勢を保つ。

(そこ……そこだめ……)

「……ここが弱いんだ」

指が、クリトリスの上で小さく円を描き始めた。

クリクリ♡ グリッ♡ クリクリ♡

「ん、んん……っ♡」

声を殺すのに必死だった。唇を噛んで、息を止めて。でも、鼻から小さく息が漏れてしまう。

「声、我慢してるの可愛い」

(可愛いって……んっ♡我慢しないと、隣の人にバレちゃうよ……)

♡

ショーツの脇から、指が入ってきた。直接、素肌に触れられる。

ヌチュ……………♡

「っっ……………♡♡」

(直接……………触られて……………)

指が、濡れた花卉を割り開いていく。粘膜に直接接触れられる感覚。ぬるぬるしてる。自分でも分かるくらい、濡れてる。

(……………私、知らない人に触られて……………なのに……………♡)

「すごい。トロトロだ」

耳元で囁かれて、恥ずかしさで死にそうになった。

「……………♡」

(言わないで……………♡)

指が、ゆっくりと秘裂を上下に撫で始めた。花卉の間を、行ったり来たり。クリトリスを掠めて、入り口まで下りて、また上がってくる。

ヌチュ……♡ クチュ……♡ ヌルツ……♡

ゆっくりりと、焦らすように触られる。

「はっ……♡ ん……っ♡ っ……♡」

息が乱れる。声を出さないようにするので精一杯だった。

入り口を、指先でくすぐられた。入れそうで入れない。周りをぐるぐると撫でられる。

クチュクチュ……♡ クチュ……♡

「ん……っ♡ んんっ……♡」

(入れて……♡ いや、違う……入れてほしいなんて思っちゃだめよ

……♡)

「入れてほしい？」

まるで心を読まれたみたいのに、耳元で囁かれた。

「……っ♡」

首を横に振った。でも、腰が勝手に動きそうになる。もつと奥を触つてほしいと、身体が訴えてる。

「入れてほしいなら、ちゃんと頷いて？無理強いたくないから」
「……っ♡」

（だめ……頷いたら……）

入り口だけを、いつまでも弄ばれる。ぬるぬると、指が滑る。でも、中には入ってこない。

ヌチュ♡ ヌチュ♡ ヌルル♡

——不意に、中指の先端が入り口を押した。

ヌプッ♡

「っ！♡」

少しだけ、中に入ってきた。でも、すぐに抜かれてしまった。

「ほら、欲しがってる。——入り口、ヒクヒクしてるよ」

また、入り口を試すように指で刺激される。

ヌプッ♡

「んっ……♡」

けれど、またすぐに抜かれてしまう。

(やだ……焦らされてる……)

「ほら。入れてほしいなら、頷いて？」

もう限界だった。身体が言うことを聞いてくれない。

ダメだと頭では分かっているのに——気が付けば、私は小さく頷いてしまっていた。

「いい子だね♡」

中指が、ズルリと中に入ってきた。

ズプッ♡♡

「んんっ……♡♡」

口を押さえて、唇を噛む。周りに聞こえないように、必死に息だけで耐える。

(入ってる……指が……中に……♡♡)

指が中で動いた。ゆっくりと、掻き回すように。

グチュ……♡ グチュ……♡

「はっ……♡ んっ……♡ つ……♡」

電車が揺れるたびに、指が奥まで押し込まれる。声を出さないようにするので精一杯だった。

「中、熱いね。——ここ、気持ちいい？」

指の腹で、中の壁を擦られた。

グリッ♡♡

「っっ——♡♡」

突然の強い快感に、身体がビクッと跳ねた。

(やだ♡そこ……なんか、すごい♡♡)

「見つけた。ここだ」

同じ場所を、繰り返し擦られた。

グリグリ……♡ グリグリグリッ♡♡

「ん、ん、ん……っ♡♡」

快楽を受け流すように、喉を鳴らす。でも、弱いところを擦られるたびに、身体が震えてしまう。

「…………可愛い」

男の声が、少しだけ変わった気がした。

「指だけでこんなに濡らして……可愛すぎでしょ」

さっきまでの余裕のある声と、少し違う。低くて、熱を帯びた声。

「ここ、ちゃんと覚えておくからね」

そう囁かれながら、同じ場所を執拗に擦り続けられた。

グリッ♡♡ グリグリ……♡♡ グリッ♡♡

「んんっ……♡♡ んんんっ……♡♡」

(やだ……そこばっかり……これ以上されたら、声、出ちゃうよ♡♡)

「んっ♡♡♡」

ひととき大きな声が出してしまい、指が一度引き抜かれた。

「……っ♡」

(……やだ♡)

物足りない。——そう思ってしまった自分に、驚いた。

(……こんな……なんでこんなに気持ちよくなっちゃってるの?)

思考がまとまらないうちに、すぐに指が戻ってきた。今度は二本一気に。

ズププッ♡♡

「んんっ……!♡♡」

口を押さえる手に、力が入った。二本の指が、ゆっくりと中を広げていく。きつい。でも、全然痛くない。濡れてるから、するりと迎え入れるように入っていく。

(二本……こんな、電車の中で……指が二本も入って……♡♡)
その二本の指が、中を掻き回し始めた。

グチュグチュ……♡♡ ヌチュ……♡♡

「はっ……♡♡ ふっ……♡♡ んっ……♡♡」

息が乱れる。さつきより刺激が強い。中を広げられながら、弱いところを擦られる。頭がぼんやりしてくる。

グリッ♡♡ グリグリグリッ♡♡

「っ……!♡♡」

弱いところを集中的に擦られて、膝がガクガクと震えてくる。

(やばい……なんか、来ちゃう♡♡)

お腹の奥がきゅうつと締まる感覚。下腹部に熱が溜まっていく。それなのに、親指が、指の腹でクリトリスをさすってくるから堪らない。

スリスリ♡グチュグチュ♡スリスリ♡グチュグチュ♡

「んっ……！♡♡」

中を掻き回されながら、クリトリスまで刺激される。内と外、同時に責められる。

(……だめ……声出ちゃう……)

グチュグチュ♡♡ スリスリ♡♡

グチュグチュグチュ♡♡ スリスリスリスリ♡♡

「ふっ……♡♡ はっ……♡♡ んんっ……♡♡」

息を殺すのが限界だった。声を出したい。出したら楽になれる。でも、ここは電車の中。隣に人がいる。

(やばい……ほんとにきっちゃう……)

グリグリグリッ♡♡♡ クリクリクリッ♡♡♡

「ん、ん、んっ……♡♡♡」

もう少しで届く。あと少しで――

――ピタリ。

指の動きが、止まった。

「っっ……!!♡♡」

あと少しだったのに。確かに届きそうだったのに。どういうわけか、寸前で止められてしまった。

(なんで……もうちよつとだったのに……)

「まだダメだよ？」

耳元で囁かれた。

「……もっと、ずっと君に触ってたい」

(え……?)

さつきまでと、声のトーンが違う。呼吸が少し荒くなってる。

「……もっと焦らしたくなってる。きちゃった」

中に入ったままの指が、ゆっくりと動き出した。でも、さつきみたいに激しくない。焦らすみたいなのに、弱いところを避けて、出し入れされている。

クチュ♡♡ クチュ♡♡

「んっ……♡ ん……♡」

(もっ……もっ……もっ……と、さつきのとこ、グチュグチュして……)

身体が熱い。お腹の奥がじんじん疼いている。さつきイきそうになつたところで止められて、ずっと寸止め状態が続いている。

グッ♡グッ♡

「……腰、振ってる。——エッチな体だね？」

囁かれて、顔が熱くなる。

(違う……身体が勝手に……)

腰が、勝手に動いてしまっていた。男の指に気持ちいいところを擦り付けるように。

「イきたい？」

耳元で囁かれた。

——小さく、頷いた。

でも、指は動かない。さっきは頷いただけで動いてくれたのに。

「……っ♡」

腰を揺らしてみろ。男の指に擦り付けるように。でも、指が逃げている。触れそうで触れない。一番欲しいところに届かない。

「んっ……♡ やだ……っ♡ 触って……っ♡」

「触ってるよ」

指が、太ももの内側を撫でた。そこじゃない。そこじゃないのに。

「もっとちゃんと行って。——何が欲しいのか」

目尻が熱くなってきた。恥ずかしいのか、悔しいのか、もう分からな
い。ただ、身体が苦しい。ずっと焦らされて、届きそうに届かなくて。

「……指で……っ♡」

口を押さえたまま、かすれた声で囁いた。

「……お願い……っ♡♡」

涙が一筋、頬を伝った。声を殺したまま、泣いてる。電車の中で、知
らない男に、聞こえるか聞こえないかの声で懇願してる。

(……もう関係ない……っ♡ 人違いでも何でもいいから……)

「イかせて下さい……っ♡♡」

最低だ。最低なのに、止められない。

「——っ」

男の息が詰まる音が聞こえた。

「……くそ。泣きながらおねだりとか……反則だろ……」

指が、やっと動いた。弱いところを、今度は逃げずに擦り始める。

グリグリグリッ♡♡♡ クリクリクリッ♡♡♡

「あっ♡♡♡ あっ♡♡♡」

「こんなの……我慢できるわけない……っ」

男の声が、荒くなってる。さっきまでの余裕は、もうどこにもなかった。

さっき焦らされた分、快感が一気に押し寄せてくる。弱いところを、容赦なく擦られる。二回も寸止めされた身体が、あっという間に限界まで追い詰められていく。

(きちやう……もうむり……っ♡)

グリグリグリグリッ♡♡♡ グチユグチユグチユツ♡♡♡

グリグリグリグリッ♡♡♡ グチユグチユグチユツ♡♡♡